

当面の技術対策（農産編）

平成23年7月1日

発行：ゆとりみらい21推進協議会 指導部会 幕別町忠類地区

曇天傾向により、軟弱徒長気味の生育が多く見られます。このような場合、病害の発生が多くなるとともに、薬害や生理障害(要素欠乏など)が発生しやすくなります。ほ場をよく観察し、病害虫や作物異常の早期発見に努めるとともに、農薬散布は早朝(朝露に注意)または夕方の涼しい時間帯に実施してください。

1 共通

(1)ドリフト防止対策

秋まき小麦などこれからの時期、収穫される作物が増えています。近年、周辺作物防除時のドリフトにより、収穫物から未登録農薬の検出や残留基準オーバーの事例があることから、より一層注意することが必要です。

【ドリフト防止のポイント】

風のない時を選んで散布する。

散布機の圧力を適切に設定し、細かい粒子の発生を抑える。

ドリフト低減ノズル等、適切なノズルを選択する。

対象作物だけにかかるよう、できるだけ作物の近くから散布する。

散布量が多くなるほど飛散するが増えるので、散布量は適切に設定する。

前回使用時の農薬が残らないよう、散布機の洗浄はしっかりと丁寧に行う。

2 秋まき小麦

(1)適期収穫の実施

ほ場確認を十分行い、子実水分が30%以下になったら収穫を開始しましょう。また、耕作組合等、集団で収穫作業を行う場合には、作業途中の降雨等、緊急時の対応を事前に十分に協議、周知徹底を図りましょう。

(2)別刈り・部分刈りの徹底

ほ場巡回時には赤かび病など病害や倒伏の発生状況を確認し、多発しているほ場では、別刈り・部分刈り等の対策を行ない、品質向上に努めて下さい。

3 ばれいしょ

(1)疫病防除

小麦の収穫作業が始まると防除間隔が延びてしまうことがあります。そのような時は、薬効期間の長い(ダブルインターバル)剤を活用しましょう。

(2)軟腐病防除

軟弱徒長気味のうえ、気温が高めで経過すると予想されることから特に注意が必要です。

薬剤については同じ系統の成分を含んだ薬剤が多いのでよく確認し、薬剤の感受性が低下しないよう連用を避けます。また、使用回数にも注意して下さい。

4 てんさい

(1) 褐斑病防除

褐斑病は、高温多湿（気温25 程度、湿度85%）で多発します。ほ場観察を行うとともに、天候に注意しながら予防防除を心掛けましょう。初発時期は、秋まき小麦の収穫時期と重なる場面が多いので、残効の長い薬剤(DMI剤)を選択し散布しましょう。

但し、連作畑や前年度てんさいを栽培したほ場と隣接している場合は、早発し発生量が多くなりますので注意しましょう。

5 豆 類

(1) 窒素追肥の判断

根粒菌の活性は、8月中旬をピークに減少するので窒素肥沃度の低いほ場や根粒菌の着生が悪い場合には窒素追肥を検討します。株を掘り上げ根粒菌の着生状況等を確認し、追肥が必要かどうか判断して下さい。

【追肥を実施する場合】

大豆・菜豆：開花始

小豆：本葉3葉展開期～開花始

窒素 5 kg/10a程度追肥

(2) 菌核病・灰色かび病防除

日照が少なく、多湿な条件で多発します。1回目の防除は、開花始後7日ころから実施しましょう。

本格的に収穫作業が始まります。

収穫機械の点検整備は事前にしっかり行うとともに、
作業中は適度な休憩・休息を取り、農作業安全に努めましょう！